

イラストから読む教科書

力強くスマツシュ!

寺田寅彦



出典：津田梅子、熊本謙二郎 *Girls' new Taisho readers*
(東京開成館、1921年)

『UP』の「学問の図像と私たち」を本号から担当することになった寺田寅彦です。寺田寅彦とはいっても物理学の偉人とは違って、イメージとテキストの関係を探る比較文化研究を細々としています。学問の話をするのは苦手ですが、学問の図像と私たちの話ならば、と迂闊にも連載を引き受けてしまいました。どうぞよろしく願いたします。

ここで取り上げるのは教科書のイラストです。第一回は、日本の英語教科書の中から、津田梅子（一八六四—一九二九）が熊本謙二郎（一八六七—一九三八）と共に著した女子学生向けの *Girls' new Taisho readers* をみます。教科書を開くと第一課にはテニスをする若い女学生の姿が描かれています。高く空を見上げ、大きく足を前に踏み出して、ラケットを振ろうとしています。躍動感にあふれる彼女の姿は伝統的な日本の女性観を打ち破るもので、その生き生きとした姿に女生徒は胸を躍らせたことでしょう。エレガントな洋装でスポーツを楽しむ、洋風に髪をカットして、眼差し高く歩を進める。女子教育の先駆者である津田梅子の教科書ならではの新しい女性像にこめられた期待が表現されています。

第一課のページ目です。まず文字情報はただ「tennis」という語だけです。まず子音に注意を向けさせて、母音を付し、音節に区切るというアルファベットでの語の形に注意を向けさせる工夫は興味深いものですが、なによりも書かれたことと描かれたことの差に、イラストとは文字情報の単なる視覚化ではないことを強く感じます。教科書という文字で書かれた内容に注意が向きがちですが、そのような教科書のさまざまなイラストをこれから力強く読み解いていききたいと思います。（寺田寅彦）

「英語教育」という幻想

阿部公彦

1 英語に熱くなりたい

今、英語教育が熱い。といっても「よし、英語を勉強しよう」と盛り上がっているのではない。熱いのは「英語教育」をめぐる議論の方である。ご存じのように、明治以来、この「英語教育が熱い現象」は繰り返して発生してきた。しかも議論はたいてい同じようなところを堂々巡りする。多くの人は思うだろう。これだけ英語教育をめぐる私たちは熱くなってきたのに、なぜ英語そのものについてはなかなか熱くならないのか、と。

まったく同感だ。つべこべ言う前に、まずやろうよ！ と言いたくなる。ただ、実は「つべこべ言う前に、まずやろうよ！」という態度そのものが、この熱い論争の一翼を担ってきたのだからややこしい。「英語は英語でやろう。理屈抜きにとりあえず英語の中に放り込め！」と主張する人が常にいる。

「文法なんか忘れてしまえ」「英文和訳なんかしてる暇はない」と言う。

仮にこうした英語勉強法を「オウム返し型」と呼ぶことにしよう。英語的環境に放り込んでしまえば、人は楽に英語を身につけるはず、という考えである。英語は英語話者に習え。必死に相手の言っていることを聞き、オウム返ししていれば、自然と単語や言い回しなど覚えるはず、だという。

「そりゃそうだ」と言いたい気持ちにはわかる。私自身、そういう環境で英語を学んだ経験はある。効力もわかる。ただ、この方法がこれまで日本でどうしても根づかなかったというの厳然たる事実である。少し考えてみれば、その理由は思いつく。まず「英語的環境」に浸るためのコスト。人、場所、時間、とすべての局面でかなりの出費と犠牲を伴う。他の活動や生活を差し置いてそうしたセッティングを作る余裕が一般にあるのか。そりゃあ無理だから、都合のつく範囲で、となるので

はないか。そうすると、形を整えただけの儀式的な英語、ついに終わるのではないか。また「オウム返し」というやり方には心理的な抵抗があるだろう。むしろそういう人が多数派ではないだろうか。幼児期にはこうしたやり方は有効だが、自意識たつぷりの思春期の青少年や、ましてや大人にそう簡単に強制できる方法ではない。そしてより根本的には、これで「知的な英語」やいわゆる「仕事で使える英語」が身につくのかという疑問がある。言葉の知的側面を無視して道具、実用、スキルと連呼する人は、大事なことを見逃している。あとでも詳しく述べるが、こと言葉の学習に関しては「注意」「興味」「意味」という要素がきわめて重要なのである。

にもかかわらず、この二〇一三〇年の中等教育は明らかに「オウム返し型」に舵を切ろうとしてきた。その一方、英語は相変わらず熱くない。産業界は「これでは困る」と大きな声をあげているらしいが、そんな中で、依然として「文法重視や訳読主義のせいで日本人は英語が使えない」との旧来の批判が繰り返されるのは、いささか奇妙なことではないだろうか。

2 英会話の起源

このあたりの事情について更に考えるため、最近東京大学出版会から上梓した『善意と悪意の英文学史』の内容の一部を紹介したい。タイトルからはあまり想像できないかもしれないが、この本は英語教育にかかわる問題も扱っている。第1章の

見出しは「英会話の起源」である。

果たして、英会話に起源などあるのか？ もちろん人は太古の昔から会話をしてきた。しかし、この本で焦点をあてたのは、近代のヨーロッパで会話が「術」として注目を浴びるようになり、イギリスでも一七世紀から一八世紀にかけ言語に対するきわめて繊細な感覚が育まれたということである。表現のえらび方以外にも、食卓で話題にすべきこと、相手の真意を読み取る方法、重要な場面での会話の例など、言葉について意識すべきことが細かく記述された。印刷術が普及し始めたこの時代、作法書(Conduct manuals)はすでに大きな人気を博していたが、とくに注目が集まったのが言葉の使い方をめぐる「作法」だったのである。

では、言葉の作法がとりわけ気になる「重要な場面」とはいつのことだろう。答えははっきりしている。プロポーズのときである。一八世紀の作法ブームと密接に絡んでいたのは結婚市場だった。男が女に愛を告白し、結婚を提案する。そんな状況ではどんな言葉がかわされるべきか。男子にとっても女子にとってもこれは大きな関心事となった。たとえば日本でも人気があるジェーン・オースティンの『高慢と偏見』は男女がどうやって接近するかを描いた作品で、ストーリーの山場では必ずプロポーズがからむ。この時代の作品は、そういう意味では男女の付き合い方の「マニュアル」として機能していたのである。

こうした「マニュアル」が普及しえたのは、そもそも人間に

「性格」なるものがあるとされたからである。性格は振る舞いや言葉の使い方を通して露出する。そこを見極めたい。人間はこうして観察の対象となった。観察という行為は、まずは対象に注意を向け、じっと見ることから始まる。近代社会の中で小説というジャンルが特別な位置を占めたのも、人間に対するこのような「興味の磁場」が生まれたことが大きい。小説には人物描写というものがある。そもそも好き好んで描写などという面倒なことを作家が行い、読者がそれに付き合うのも、その奥に何かを読み取りたいという「注意のベクトル」が存在し、それを作家と読者が共有するからなのである。

ただ、面白いのは、対象への興味なるものが「語り手→読者」、もしくは「読者→語り手」といった方向でも発生しうることである。だから、語り手や読者も振るまいのコードを意識する。性格すら持つ。たとえば、語り手は読者に対する「善

意」や「親しみ」を織りこんで語ったりする。そういう語り手からの「親しさ」の表明は、読者の方にも何らかの「読み心地」を生む。愛と善意と親しさに満ちた語り手という像は、近代の出版物ではほとんど約束事とさえなってきた。ただ、二〇世紀にかけてテクストの善意の表明の仕方が変わる。語り手が示す善意を読者が素直に受け取らなくなってくるのである。どうも裏があると思えてしまう。「善意の表出」というより、「善意の演出」と見えてしまう。

そういう流れの中で、次第に語り手も素直に「善意」を表現しなくなる。一九世紀から二〇世紀にかけての文学作品では、愛情や敬意よりも、無愛想やイライラ、冷淡、ときには嫌悪感が表示される。私たちは「善意」よりも「悪意」にこそ敏感に反応するようになったのである。ときには、「善意」を伝えるのに、「悪意」の仮面をかぶる必要さえある。というわけで拙著

【世界歴史選書】
全15巻・完結

海のかなたの ローマ帝国

増補新版

—古代ローマとブリテン島—

南川高志

辺境から「帝国」のあり方を問い直し、多くの議論を喚起した旧著に、新稿「ローマ帝国支配後半期のブリテン島」を加えた増補新版。四六判・本体3000円

インテリジェンス の世界史

—第二次世界大戦からノーデン事件まで—

小谷 賢

第二次大戦から今日まで、通信傍受技術の飛躍的な発展と、米英を中心とした通信傍受網の変遷の現代史。【岩波現代全書】四六判・本体2000円

日本資本主義の 大転換

セバスチャン・ルシュバリエ
新川敏光 監訳

日本経済の凋落はなぜ生じたのか。「改革の遅れが原因」とする通俗的な見方を排して、1980年代以降の変化を新たな枠組みで分析。四六判・本体3400円

小平邦彦が 拓いた数学

上野健爾

複素多様体論の研究で20世紀数学を牽引した日本人初のフィールズ賞受賞者、小平邦彦。その思考の軌跡を論文や著作をもとに再現する。A5判・本体4500円



岩波書店

東京・千代田・一ツ橋

【定価は表示価格+税】

<http://www.iwanami.co.jp/>

集合住宅30講

植田実 ル・コルビュジェのユニ
テ・ダビタシオンほか19世紀末以
降の内外の名作について縦横に説
き明かす。カラー写真多数。¥4200

パクリ経済

コピーはイノベーションを刺激する
ラウスティアラ/スプリグマン コ
ピーがイノベーションを刺激する
法則をフォントなどの具体例で提
示。山形浩生・森本正史訳 ¥3600

世界文学論集

クッツェー エラスムスからガル
シア＝マルケスまで、緻密でパワ
フルな読解を実践するノーベル賞
作家の全14篇。田尻芳樹訳 ¥5500

セザンヌ

ダンチェフ セザンヌはいかにし
てセザンヌになったか。最新の研
究成果から生まれた伝記決定版。
カラー80頁。二見史郎他訳 ¥9000

哲学への権利 2

デリダ なぜ哲学を学ぶ権利があ
るのか。大学とは何か——哲学教
育論の集大成。全2巻の解説を付
す。西山・立花・馬場ほか訳 ¥7200

翼ある夜

ツェランとキーファー

関口裕昭 ユダヤ性とゲルマン性、
相反するはずのふたりの作品がも
つ深い関わりとは。その創作の謎
から戦争の記憶が浮上する。¥5800

大脱出

健康、お金、格差の起原

ディートン 2015年度ノーベル経
済学賞受賞者の最新刊。成長と健
康の関係から格差のメカニズムを
分析。松本裕訳 [好評4刷] ¥3800

東京文京本郷
5丁目32-21 **みすず書房**
tel 3814-0131 fax 3818-6435(税別)
http://www.msz.co.jp

ものがある。どんなやり取りも、注意が向かなければ始まらない。コミュニケーションで最低限必要なのは、言葉やジェスチャーですらないのだ。注意を向け興味を持つという過程こそが第一歩である。すぐく当たり前に聞こえるだろうが、そんなことをあらためて考えなければならぬのが今のコミュニケーションの状況なのである。

「英語漬け」をとる人々の多くは、おそらく「何でもいから、とりあえず仕事で英語が使えるようになってほしい」と思っている。英語なんか道具にすぎない。透明であればあるほどいい。だから「つべこべ言わずにやれ」と言う。もちろん「つべこべ言わずにやれ」でうまくいくこともある。でも、うまくいくのはおそらく、興味という要素ががちり食いこんだときだ。一人で日本語の通じない社会に放り出された人なら誰でもわかるだろうが、その根源的な不安は相当なものである。

だから、必死になる。必死でまわりの世界に聞き耳を立てる。しかし、この時点ですでにその人は道具としての英語などほかに越えた領域に足を踏み入れている。死活問題として、英語の周辺領域に関心を持たざるをえないのだから。

今、熱く英語教育について語る方々にあらためて意識してほしいのは、この興味のメカニズムである。教育現場で言葉を扱う以上、興味や関心と「言葉そのもの」とを切り離して考えることは不毛である。言葉の向こうには必ず人間がいる。その人間にどのように注意を向け、何を読み取り、どう反応するか。そうした要素から切り離したら、言葉はその養分を失い屍のようになるだけだろう。こんなに熱く英語教育を語ってきたのに、なぜか人々が英語について熱くなれないのだとしたら、それは英語教育を英語だけのことで考えてきたためではないだろうか。ほんとうは「英語教育」などという領域は存在しない

そこで英語教育の話に戻りたい。善意にしても親しみにしても、不満にしても悪意にしても、言葉にまぎれて「何となく相手から感じる気分」というのは、コミュニケーションの中ではきわめて大事なものだ。なかなか成文化はできないけれど、何

3 英語教育の出発点

善意や丁寧さの表現は、敬語や礼儀作法の発達した日本語特有のものだと思う人もいられるかもしれない。日本語の敬語はなかなかうまく外国語に翻訳できないとも言われる。しかし、敬意や善意や親しみといったものをあらわすコードは、人間文化にある程度普遍的にみられることがわかっている。近年、言語学や行動学で話題になる「配慮（ポライトネス）」という概念もそのことを理解する助けとなる。人が相手に対して「配慮」を示すのにどのような方法があるのか、それはどのように運用されるのかといったことを、文化や地域をこえて考察する基盤は整いつつある。拙著では、そうした態度表明の痕跡を、時代を代表する作品の中に確認することで、一種の文学史を描いてみようと思った。

それから形で学習者に知ってもらわなければならない。とくにシグナルとして出したつもりがないのに、相手にシグナルとして受け取られる可能性がある以上、こうしたルールを知っているかどうかは切実な問題となる。

しかし、今、私が言いたいのは、英語教育のトピックにこうした「配慮」についての項目を追加せよ、ということではない。むしろ注意を引きたいのは、「配慮」の働き方を教わるにせよ、自ら学び取るにせよ、学習者にはある準備が必要だということである。言葉は相手へと向かう「興味」なくては動き出さない。シャドウピッチングや素振りだけではだめなのだ。もちろん、相手に愛と善意を示しましょう、というのでもない。ときには悪意や嫌悪感を持ってしまいうこともあるだろう。でも、善意も親しさも冷淡もイライラも、「興味の磁場」があればこそ生ずる心の働きなのだ。そうやって「興味の圏域」をあちこちに設定するのが、まさに人間の文化というものだった。

言葉を学ぶときに、そうした要素をなおざりにしたらいったい何を学んだことになるのだろうか。すでに言葉のかわりに、電子データによる文字や記号やイメージを通して行われるやり取りは多い。そのことを嘆く人もいるが、言語が通じない人同士がやり取りするうえでこうした装置が有効なことは認めなければならぬ。「言葉的なもの」を代理するメディアは、これまでもほとんど形を変えていくことだろう。しかし、変わらない

いのかもしれない。言葉をなめてはいけない。言葉の根は、人間の奥深く、神経や内臓や心や魂といった思いがけない深さまで伸びている。地上に出ている部分だけ手軽に所有すればどんなに楽かと思う。でも、そうはいかない。

その先に踏み出すための可能性はあちこちに見えている。言葉を使えるようになるには、まずは言葉に興味を持つべきだ。さらには「興味を持つ」とはどういうことに興味を持ちたい。文法や訳読といった旧来の教育法も、そうした点ではそれなりの効果があった。それを一生懸命忘れようとするのは愚かなことだ。「英語教育」とは「英語そのもの」なるものを教えることだという幻想を早く捨てたい。英語にせよ国語にせよ、せっかく学校制度の中に、「注意」や「興味」や「意味」がどう機能するのかを考え、対応力を鍛える場があるのだから、それらがうまく活用されることを願ってやまない。

*1 寺沢拓敏『日本人と英語』の社会学（研究社）は、このあたりの事情についてデータをもとにした批判を行っている。とくに第五章「英語学習熱」「語学ブーム」は実際どれだけのものなのか？参照。

*2 たとえば刀称館正明が『朝日新聞』で何度か連載している「英語をたどって」というシリーズでもこの点が指摘されている。二〇一三年一月八日夕刊「人材不足は教育のせい？」など参照。

（あべ・まさひこ 英米文学）

エウクレイデスの“Wrong Text”

斎藤 憲

このほどエウクレイデス全集の第2巻をようやく上梓できた。この巻には『原論』の整数論と非共測量論が含まれる。残るは第3巻（『原論』第XI巻以降の立体幾何学）と、第5巻（音楽論と天文学）となった。この第2巻では、「エウクレイデスには素因数分解という概念がなく、そもそも3つ以上の数の積という概念が希薄である」などの新解釈を提示した。数学（数学教育）分野の読者はこの主張に驚かれるかもしれない。驚かれた方は是非全集第2巻を手にとってその根拠を吟味して頂きたい。縦書きの本稿では、細かい数学的議論は展開しにくいので、テキスト伝承の問題をとりあげたい。簡単に言えば、我々が読んでいるのはどこまでエウクレイデスを書いたものなのかということである。

『原論』の写本と校訂版

現存するギリシャ数学の基本定理集『原論』は、エウクレイ

阿部公彦
善意と悪意の英文学史
語り手は読者をどのように愛してきたか

四六判・三二〇頁・三二〇〇円

阿部公彦

小説的思考のススメ

「気になる部分」だらけの日本文学

四六判・二二八頁・二二〇〇円

阿部公彦

詩的思考のめざめ

心と言葉にほんとうは起きていること

四六判・二四〇頁・二五〇〇円

山本史郎

東大の教室で『赤毛のアン』を読む

増補版
英文学を遊ぶ9章十授業のあとのオマケつき

A5判・二二六頁・二四〇〇円

斎藤兆史・野崎敏

英仏文学戦記

もっと愉しむための名作案内

四六判・二八四頁・三二〇〇円

東京大学出版会（表示は本体価格）

デスによって紀元前三世紀前半に編纂されたものとされる。西欧では十二世紀にアラビア語からのラテン語訳がなされ、この翻訳に十三世紀のカンパヌスが大幅な注釈・改訂を施したバジョンが大学のテキストとして使われて普及した。一四八二年の最初の印刷版もカンパヌス版であった。

十六世紀以降はギリシャ語写本からの訳が出版される。我々が読んでいるテキストは、デンマークの古典学者ハイペアが一八八〇年代に鉄道網を駆使して欧州各地の図書館のギリシャ語写本を調査して作成した校訂版である。ハイペアは、エウクレイデスだけでなくアルキメデスやアポロニオスも含め、現在使われているギリシャ数学文献の校訂版を作成した。

このハイペア版『原論』は、十九世紀初頭にナポレオンの遠征に随行した学者がヴァティカン図書館からパリへ持ち帰った「非テオン版」のギリシャ語写本190番（後に返還された）を非常に重視している。これは、四世紀の数学者アレクサンドリ